

Ⅱ. 特別講演

クリニカルパス電子化の実際 ～利便性と落とし穴～

黒部市民病院
リハビリテーション科関節スポーツ外科

今田 光一

電子カルテの普及に伴い、クリニカルパスも電子化してシステムに組み込む試みが近年報告されるようになった。電子化で、一括オーダーによる標準化や安全化、バリエーション分析といったことがより効率的に行える利点がある一方、紙パスでは容認されていた業務パターンやパス形式・作成方法の寛容性は制限される。また電子ゆえの視認性や展開速度の問題や表記法の制限、法的な制限など電子カルテ導入前に知っておくべき事項も多い。

より効率的にまた有効なパス医療が行えるツールとして電子カルテシステムを構築して行くためには、ユーザーである医療者側が積極的に開発に関わる必要がある。現状ではパス業務（標準化検討からパス大会、パスの改善まで）のすべてを電子システムでは行えない。パスを医療ケアのPDCAサイクルの基軸として使用するためには、電子化されていないからといってバリエーション分析や改善など人の手で行う努力を怠ってはならない。パスの電子化とは、単なるパス表型のセットオーダーでないことを熟知しておく必要がある。

第5回新潟クリニカルパスフォーラム

日時 平成19年3月17日(土)
午後2時15分～
会場 ホテル新潟 3階 「飛翔の間」

I. 一般演題

1 急性期病院における

大腿骨頸部骨折地域連携パスへの取り組み

塩崎 浩之(整形外科医師)
廣瀬 恵(看護師・パス委員)
巳亦 圭子(看護師長)
今井 克敏(理学療法士)
神田 義則(MSW)
木津 顕(パス事務局)
済生会新潟第二病院
大腿骨頸部骨折
地域連携パス作成チーム

当院は、前方連携の強化のために平成12年にオープンシステムを稼動し、後方連携の強化のために平成14年から病院連携会議を定期的開催するなど、地域ネットワークの構築に取り組んできた。また、平成14年から院内でクリニカルパスを運用している。

これらの活動をもとにして、機能分化した地域の医療資源を有効活用し地域完結型の医療・福祉を提供するために、大腿骨頸部骨折地域連携パス(以下、連携パス)に早くから取り組んできた。平成17年9月連携パス作成チームを発足、みどり病院スタッフとともに連携パスを作成、平成18年4月みどり病院と連携パス運用開始、その後猫山宮尾病院、岩室温泉病院とも連携パスの運用を行っている。独自に作成した「経過報告書兼依頼書」により、患者情報の共有化を円滑にするとともに、連携病院退院時の患者情報が当院にフィードバックされるように工夫した。

患者入院から連携病院への転院および退院にいたるまでの連携パス運用の実際の手順について